回廊

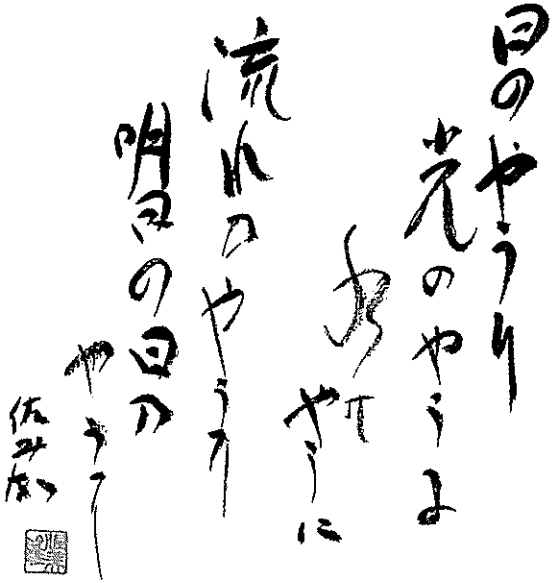
日本歌人叢書
新雪叢書

歌集

回廊

寺前昭子

短歌新聞社



前川佐美雄 色紙

序

―身体感覚のなかの風土―

前川佐重郎

寺前昭子さんはなかなか人間としての味わいのある方である。正面を見据えた眼と、きりっとひき締めた口元から、時折不思議な言葉が飛び出し、それがそのまま詩語になっていることがある。

短歌というちっぽけな詩型は、人間臭とも言うべき人としての面白さが全面に出てこないと、感情生活を詠み込んでも作品に厚みが加わらない。寺前さんには天性としての人間の地の面白さがあるように思える。

そんな寺前さんが歌集を編まれた。寺前さんは生れは大阪であるが、加賀の地に長く住まわれ、加賀を終の地ときめられた。冬に雪が深く、四季それぞれの特徴の明瞭な加賀の地は寺前さんの作品にも独特の陰影を与える。季節が寺前さんの身体感覚を通過したとき、つぎのような作品が生れる。

・追ひ越さず列をみださずとどまらず暗き天より一途ふる雪

・ひとときの陽に雪の街きらめけばアリスとなりてさ迷ひゐたり

・降りて晴れ積もりて晴るる今年春、松に置く雪穢れをしらず
・白桃よふれなばそこより傷もたむそのやさしさを灯の下に置く
・捨て沼の冬に入らむとするひかり逝く蟋蟀の目のいろに澄む
・寄進せし湯女の名刻む石ほとけ供ふるみかん二つがぬくし
・女童ふたり草相撲する昼下り青田かけゆく風の足見ゆ

一首目。絶え間なく降りしきる雪を見つめていると、ふとそんな感懐をもつ。日ごろの作者の眼差しや姿勢にどこか「一途さ」を感じるだけに、この一首を読むと雪降る様が作者の化身のように思えてくる。自然な擬人法が加賀の冬を実感させる。

二首目。白一色に生れかわった街はラビュリントスとしてひとを誘なう。街に出たアリスが日常を遁れ冒険に出る。作者のよろこびと好奇の眼が泛んでくる。雪は陰鬱ばかりではない。

三首目。雪国では、こんなふうにして日々積雪を増してゆくものかもしれない。松に置かれた雪は作者にとって特別のものである。その特別なこころは、ひとつの普遍性をもって日本人に届く。

四首目。桃の果の危うさを詠んだ作品は多い。この一首は触れただけで傷む桃をそっと灯のもとに置いて眺める。その後、食べるという人間の行為の予感を看てとると作者の顔が泛んできておもしろい。

五首目。「捨て沼」という言葉に興味を抱く。日ごろ見むきもされない田園の片隅にある小さな沼かもしれない。その「捨て沼」が初冬のひかりの中で精彩を取り戻す。結句の修辞は作者の発見である。

六首目。この一首には哀歓と祈りと人間の温もりが込められている。下の句に癒されている作者の眼に読む者も肯う。

七首目。この一首に多言は要すまい。今どきめずらしい光景である。健康体の日本が遠い田園地帯にあった。風さえも健やかである。女童はたぶんリンゴ

のような赤い頬をしていたにちがいない。

寺前さんの作品を読むと、どの一首にもさしたる破綻がない。ひとは時に破綻のなかの歌の面白さを説くが、それは短歌という伝統詩型を極めた者が実験として行なう冒険を指して言う。

寺前さんは、加賀の地で伊林利子氏に師事し、また地元歌誌の仲間とも研鑽を積んできた。伊林氏の指導は詩の原理に対して厳格で揺るぎがない。そんな恵まれた環境のなかで生れた寺前さんの作品は、つねに読者を眼前に置き、その上で作者の地肌とも言うべき個性が貌をのぞかせる。

・くさいろの津軽の風ゆき高原に牛のピアスの目じるし光る
・被写体となるを拒める少年はトンボ放ちて野の風となる
・唐突にある朝ガレージ建ち並び紫苑の原は盗まれゐたり

・ものの音なべて吸はるる雪の夜や素面(しらふ)のわれは眠るほかなく
・洩らしたる友のひと言判じかね苺の粒をゆつくりつぶす

これらは人間の感情生活の揺れが、ある節度の中に収められている。その節度を読み手が了解したとき、それぞれが掌篇小説のような小さな物語を味わえる。

寺前さんはこうした味わいを今後さらに深めてゆくにちがいない。定型は魔物である。集を通して印象に残った作品を幾つか引いて筆を措く。

・にびいろの天漏るる雨の打つ音を肩にこらへて雪となる前
・束の間にわが足もとを昏々と雪は消したり、なに覆はむや
・見かへれば散りしきやまぬ花渦の夕光のなかわらべを立たす
・凋(かな)しみの化身か蟹はしろく透き山陰の隅に身をかくしたる

・とほき日の戦野に杖つき蓬髪を風にさらせり、夫の後姿（うしろで）
・長旅の果ての秋鮭（あきあぢ）ふるさとに空洞の腹さらし吊さる
・喪の葉書しるす夜の更け筆ペンのとどこほりつつ紙を擦る音
・冬陽さす片潮道に香をまとひ爐がひとり雪中花売る
・バラの芽の小さき針に雪降りて傷つきやすき受験期の少女
・嫁（ゆ）きし娘（こ）の残せる和紙の内裏雛寸あるなきが春により添ふ

了

平成十三年九月

目

次

序　前川佐重郎

(一)　雪ぐに

きさらぎの雪　一九
雪のはなびら　二三
友　よ　二六
父の背　二九
無量寿の光(かげ)　三三
一つ葉に棲む　三五
滅びのひかり　三八
いにしへのあと　四四
百度石　四八

風曼陀羅　五二
流るるものら　五五
移ろひ　五八
秋かげ　六二
歳晩　六七
翼もつもの　七〇

(二) 遺跡

吉野路　七七
桜散る中　八〇
錫の音　八三
水無月の神　八六
北のパノラマ　八八

遺　跡　㈠　九四
風と雲と　一〇二
慰霊の旅　一〇五
一　夏　一一一
紙の蝶　一一四
遺　跡　㈡　一一七
秋ふかし　一二四
冬の音　一二七
越前岬　一三〇
仏の国へ　一三四
㈢
明　日
二月の春　一四一

風の野に　一四四
春　宵　一四七
いもうとよ　一五〇
里　山　一五三
螺旋階段　一五五
遺伝子　一五七
カレンダー　一六一
灯の下の花　一六五
風の便り　一六九
晩　夏　一七二
夕　刻　一七六
風の又三郎　一八〇
冬　愁　一八三

明日へ　一八六
遮断機　一九〇
二十世紀　一九二
跋　伊林 利子　一九七
あとがき　二〇一

回廊

(一)

雪ぐに

きさらぎの雪

追ひ越さず列をみださずとどまらず暗き天より一途ふる雪

街灯のスポットライトに雪は舞ひ雪はただよひ恍惚と降る

垣間見しは鬼の狂(たぶ)れか真夜闇に雪が悶えて炎(ひ)となる瞬時

きさらぎのあしたの浜に雪まとふ雄松ひともと聖(ひじり)のごとし

石までも凍てゐむ雪の墓原に赤松の肌冴ゆるきさらぎ

きさらぎの雪が埋むる墓原に魂のあそびかしらしらと梅

つなぐ血の傲りにふとも吐き捨てしことば悔いつつ雪踏みてをり

ひとときの陽に雪の街きらめけばアリスとなりてさ迷ひゐたり

朝光に雪しづくする二月尽、ルノワールの画布赤を滲ます

雪国のすさびになりし花びら障子そこよりほのと薄明りせる

きさらぎの雪は温しとたより書くはや雪国に住みて久しき

雪のはなびら

しろしろと目鼻削げたる野仏の面(おもて)ぬらして春の雪降る

いづれびと供ふる閼伽(あか)かひとひらの淡雪のかげやさしき花は

淡雪に〈王昭君〉の面影を顕たしめ蠟梅咲き澄みてをり

こゑ交しヒワ群れとべば赤松の谷にひととき雪の花散る

はしけやし松の林を華となしやよひ降る雪ひかりにあそぶ

降りて晴れ積もりて晴るる今年春、松に置く雪穢れをしらず

野のものをふつふつと煮る宵窓に翳をうつして淡きゆきひら

戻り雪積む夕つ方その膳にうすくれなゐの鰆添へむか

春やよひ雪の花降れわが髪にパールホワイト少し散らして

うすら雪なごりの雪に戻り雪、やよひ降る雪いづれやさしき

友よ

慰めむことばつまるに病む友は自ら「癌」と告げて目つむる

病む友の痩せ痩せし背をさすりをり眦の濡れ互(かた)みにかくし

曳くかげに秘むるいのりの嵩おもく癌病棟の千の折鶴

長病みし友の通夜より帰り来ぬ深夜のシャワーに思ひ打たさむ

他人(ひと)の手に移りて三歳(みとせ)か友の店の錆びしシャッター雨に打たるる

友どちはつぎつぎ病みぬ沙汰もなく消ゆるがに逝き春を雪降る

父の背　(一)

凍風(いてかぜ)に立つ裸木は敗戦のふゆ帰還せし父の背後(うしろ)か

老い父と旅する朱夏の隠岐の島、廃仏毀釈のうつろに逢ひぬ

黙(もだ)ふかく天皇(すめろぎ)の塔あふぎつつ老父はうすき背すぢ正しぬ

直ぐ立てる花梨の幹を撫でにつつ冽(すず)しく生きし父の背思ふ

残り葉も落しつくせる老桜の屹然の幹にゆふあかねさす

(二)

枯れて病む態のけはしさ白髪たち埴輪のごとき父の面(おもて)よ

ボンベより泡かぎりなく生(あ)れ消ゆる静寂(しじま)を父よ、何おもひ臥す

この春のまばらなる桜花わが萎えしこころにふかくしらしらと散る

生も死もわかたずなりて春の日を白布にねむる恍惚の父

寝ねなむと背の向きかへて麦秋を父は他界へひとり逝きたり

無量寿の光（かげ）

小指より滴るしづく桃の実を頒ちくれたる父のてのひら

白桃よふれなばそこより傷もたむそのやさしさを灯の下に置く

ステンレスの夜の鏡にみづからを写せる桃は妃のごとく在る

灯明りにすわりやさしき桃の実は無量寿の光ふかくやどせり

まふたつに割る桃の実の種まろし桃太郎説話をふいにおもへる

一つ葉に棲む

おもおもと墓石おろされ雨のなか終の住処のここに定まる

束の間に土とならむを常緑(あを)き松を背にする倶会一処なり

右の墓左の墓へあいさつをかはす思ひの礼(ゐや)たてまつる

守り人のなき墓所なれば季ねがひ水仙・百合の球根植ゑぬ

墓地前に小さき蓮田のこされて夏空の下うろこぐも浮く

みどり葉のあふるる生命にかこまれて蓮の蕾は曙のいろ

露ひかる蓮華化生（れんげけしやう）の蓮の田よ蜻蛉も蜘蛛も一つ葉に棲み

美術館（ミュージアム）の壁とふ壁に睡蓮が光（かげ）とゆれゐしパリ昼下り

滅びのひかり

とほき代のなにを秘めゐむ捨て沼のかげふかぶかと風も通はず

捨て沼の一樹と見るや座す膝にみどりいろ透く蜘蛛の子の這ふ

この沼のあるじの蟇(ひき)か唐突に底ごもるこゑの追ひたてやまず

だしぬけに一羽のとべばヒワの群れつづきてひととき林をゆらす

捨て沼の冬に入らむとするひかり逝く蟋蟀の目のいろに澄む

（山代・旧農業用水池）

逆潮に伝馬船の水脈ひきしとほき日の顕つ船泊(ふなはて)の川

ふぶく日も素足に水夫(かこ)は立ちしとふ川戸(かうど)の水面茫々の光(かげ)

めぐらせる高垣のうち人なくて昼の最中(もなか)を栗の花散る

とほき日に栄華きそひし舘古り卯の花くたし紋瓦ぬらす

荒海をゆきし水夫（かこ）よとあと追ふに北前船の夢は雨なか

（加賀市瀬越町・北前船主の舘跡）

たかだかとプラタナス一樹のこりをり廃校の庭に緑をこぼす

廃校のなだれを埋むるドクダミの十字の白花微動だにせず

バックネット錆びたるままに海老蔓を生ひからませて斜面(なだれ)へつづく

ひとところ残る芝生に陽のあたりタンポポの絮毛連なりてとぶ

風ばかり吹き過ぎゆける廃校のフェンスにからまる紅き蔦の葉

（旧山代中学校跡）

いにしへのあと

能登線のオレンジ車輛と行き違へ〈ボラ待ち櫓〉の海沿ひを過ぐ

珠洲焼の〈綾杉紋壺〉くち缺けしがおもおも語るとほき潮路を

灰色の〈櫛目紋壺〉の口細くうちにくらぐら遠代いだくや

珠洲焼の秋草紋様、ありなしの風は縄文の青をそよがす

海底のしづけさ湛へ玻璃内に須恵器は現(いま)をしづもりゐたり

（能登・珠洲焼）

古墳史をしるす碑(いしぶみ)苔むして綿まとふがになりて日のなか

千余年石棺をおほひ来しといふ円筒埴輪のしづかなる朱

提瓶(ていへい)は肩まろやけく口ほそし児の水筒のかたちのままに

玻璃ごしの蓋坏（ふたつき）・瓮（もたひ）・遠つ代の祖（おや）の生活（たつき）を語りかけ来る

ながきながき土のくらみに耐へていま双耳の壺の釉薬てらふ

（加賀市勅使町・二子塚町古墳）

百度石

薬師山つらつら椿は風の研ぐ厚き葉陰にあけをゆらせり

石仏のうすき目ぶたに手のひらのアルミ貨の上に春の陽ひかる

「阿」の力士こゑもろともに五指ひらき煩悩払ふとその掌構へり

炎昼を開山廟に般若経誦する一途のこゑとほり来ぬ

滝を背に不動明王立ちませり近づき見れば片目なりけり

萩・薄・漆・楓に吹く風を石のほとけのそばにききをり

夕光にいろは紅葉はあかあかと瑠璃光菩薩の格子戸へ降る

寄進せし湯女の名刻む石ほとけ供ふるみかん二つがぬくし

ふりむけば雪の小坂のひとところ湧き出づるがに緑(あを)きタビラコ

ゆきの音の傘かたむけてゆく坂に八十八体おはす石仏

わが一生(ひとよ)終へたるのちも百度石かたへの石の仏おはさむ

風曼陀羅

種を守る生はすさまじ黄の風となりてながるる松の花粉の

十字形(クルス)あまた刻まれし松は戦日(いくさび)の傷みあらはに立つ風の中

梅雨冷えに風鈴売りのこゑ流れいづべの辻もみづいろの風

女童ふたり草相撲する昼下り青田かけゆく風の足見ゆ

くさいろの津軽の風ゆき高原に牛のピアスの目じるし光る

被写体となるを拒める少年はトンボ放ちて野の風となる

最終の跳躍にいどむルイス立つ風待つ間(あひ)を鳥のごとき目

父逝きてはや五歳(いつとせ)か木偶(でく)のごと野にむきて佇つ秋風のなか

水引草（みづひき）の朱ゆらしつつ夕さりの風はひと日の悔い流しゆく

流るるものら

たそがれの水路に栗の花匂ひ澱みゐしものひそと流れぬ

もののいろしろく見えくる暁に自浄のごとく啼き澄める蟬

すぢ雲の流るる朝の陽に透かし夏のガラス器時間(とき)かけて拭く

くちなはも蜻蛉も蜂もひかりつつ古寺の庭に秋の陽ながる

観音経ながるる霧の坂の上、撞かずの鐘楼かたぶきて在り

長谷寺の千の地蔵に雨そそぎ千の嘆きも流してゆきぬ

石切りの里の夕べの石の橋くぐりて赤き椿ながるる

ながし得ぬことば一つを胸内に夕べを長く爪そろへをり

いづこにても天は永遠、雲ながれ風ながれ現身に光ながれて

移ろひ

唐突にある朝ガレージ建ち並び紫苑の原は盗まれゐたり

星戸とふ邑(むら)に住みゐき喫茶店に名のみ残りてビル建ち並ぶ

夢の夢と思ひゐし自販機あふれをりいつしか巷に語らひうすれ

墓石の亀裂のふかさ測りつつ蟻の出で入る態に見惚れぬ

サーカスの一輪車繰(く)る若きらに混じれる老いの貌ひとつ見ぬ

イエライシャン星と咲きたり口重く夫はビルマの戦さ夜を言ふ

峡のそらアルタイル西へ移るとき八月の風は素肌にやさし

この地球に人たり得しと思ふ真夜、屋根の上いま星移りゆく

夕闇に匂ひことばと灯のことば草生の虫のことばかぐはし

またの世のあらばこの身は蝶となり夕萩群にやどり託さむ

祭の灯とどかぬ杜の草むらにきりぎりす啼き季は移ろふ

秋かげ

大咲きの黄菊いちりん垂直に朽ちゆくまひるものの音せず

ヒアデスのひとつ秘むとぞ思ふまで瑠璃色かがやき鳥兜咲く

はかどらぬ会議終へ来て灯の下に鈍き光のイヤリングはづす

深谷のうすずみの空を画布となし樹も草も燃ゆ一期一会と

一会なれ、明日は散るとふ沙羅双樹のもみぢ極むる下にたてるは

醍醐寺の草もみぢ揺れくづれゆく土塀にかげをうつす寂光

地のしめり掬ひつくして野牡丹はむらさき極む夕明り中

老いふたりなすすべなけれ「再会（ツアイツエン）」と孤児の呼ぶを俯きてきく

裡ふかき鬼やりがたし日の暮れを湯気しらしらの行方追ひつつ

老いゆくを否みて赤きルージュひき秋の鏡の中に立ちたり

暮れ迫りひと日障子を張り替へぬしろき砦になにを守らむ

にびいろの天漏るる雨の打つ音を肩にこらへて雪となる前

歳晩

街なかの旧家のひとつ毀たれて洞となりたり、しんしんと雪

歳月に毀たれつづく街並を雪出しの風沁みて過ぎたり

束の間にわが足もとを昏々と雪は消したり、なに覆はむや

雪闇の玻璃戸を素手に拭ひつつ積もりし雪の嵩測る夕

石の上に石のかたちに牡丹雪ひと日降り積みやはらぎを見す

石垣の隙に新雪たまりをりひそけき光だれへともなく

軒ひくきベンガラ格子の湯の宿は雪を担ぎてひと日暮れたり

極月の星屑ながらふたまゆらにわがはかなごと天へ放たむ

星降りしうつつは昨夜(よべ)の夢なりや今宵くらみて野に雪の降る

残り代をつつしみ生きむ初春へ越前水仙うつむきて咲く

翼もつもの

北ゆ来し雁やいかにと合はせゆくレンズに嘴のときいろ光る

背の雪にかしらあづけて眠る鳥いづこの夢を見るや動かず

池の面の群れの真中に眠りゐる真鴨の衿のふかきまみどり

冬の池憩へる群れのなかに立ち鷺は片脚のかげひとつ曳く

寒からむひもじからむか裸木のノスリは俯き身じろぎもせず

枝間より獲物を狙ふオジロワシのひたすらの目に孤りの思ひ

余光さすさざなみを蹴り白鷺はひらりひらりと水面を移る

発ちゆかむ滾ちに鴨はしぶきあげ羽搏ちて走り走りて羽搏つ

いつの夜の謀らひなれや雁の群れ一羽が発てば列なして飛ぶ

薄闇の黒点たちまち峠の空を群れとなり礫(つぶて)となりて鳥去る

翼もつものの五感に発ちゆけりきさらぎの雪散りくる闇を

(二)

遺

跡

吉野路

杉襖左右（さう）に見すごし岨道のゆきつくところ〈西行庵〉あり

ふきあぐる風に熊笹なる庵、坐す〈西行〉の木像ひとつ

老法師、人の音せぬこの庵に夢ほのかなる未明(あさ)を待ちしや

紫雲英(れんげ)咲く飛鳥の里よ石を積む〈入鹿〉の首塚ひとつを残し

石舞台の石の間よりさす光(かげ)は彼岸・此岸を往きかよふらし

壺坂の寺を埋めて清浄の灯りとも咲く著莪のはなむら

南朝の宮居の跡をしのぶ草咲き継ぐ花のうすきむらさき

鯉のぼり泳ぐ空へとさくら満ち谷ほのぼのとうるむ吉野路

桜散る中

さうさうと無残怺へしさくらばな今朝の光にこゑあげて散る

水底はいづこの春や咲きみつる桜も空も沈きさゆらぐ

阿波の名の石のほとけも心経を誦する姿もさくら散る中

桜万朶ひかり曳きつつ空に舞ふ来世は乞はず風のまにまに

もの煮ゆる音のやさしき真日中に老木の桜ゆるゆると散る

法楽や身の蓬髪にほうほうとさくら散りしきひと日暮れたり

見かへれば散りしきやまぬ花渦の夕光のなかわらべを立たす

ひとり居る日の覚悟など茫々と思ふゆふべを桜ふぶくも

錫の音

霧さぶる百段道（ももきだみち）の錫の音に黄泉路ゆく日のしづけさをきく

そらおほふ杉しんしんの坂をゆきわれの無明に石ひとつ置く

坂道の水引草は露にぬれ涙地蔵により添ひゐたり

凋(かな)しみの化身か蟹はしろく透き山陰の隅に身をかくしたる

桃の木の丈の低きをいたはりて遍路道ゆけば風にいろあり

山寺に菩薩あふぎてふりむけば遠世のいろの海のかがよひ

那智山の葉裏返しのかぜ透り滝に沁みゆく巡礼の鉦

棒読みに般若経誦する夫のかげさまになりつつ山坂くだる

水無月の神

澱むものあまた溶かして水無月の水皺(みしわ)やさしき〈北潟〉の湖(うみ)

あかねするみづうみやさし水底の魚族(いろくづ)となりねむらなわれも

季は今みどりさみどり吹く風も流るる水もそれをうつして

馬鈴薯のみどり葉のびて空豆の莢のま緑ずつしりと垂る

茄子の花トマトの花の星型ら地より仰ぎぬ梅雨の晴れ間を

水無月の神より賜ふ木にみどり草にしらつゆ星かげの花

水無月はわが生れし月、婚の月、早苗田に水の揺るる月なる

北のパノラマ　(一)

牛にあひ牛とわかるる北の野のサイロのかげの板屋根さぶし

オホーツクの渚に動くものあらず草食む牛もひとつかげ置き

最果ての水無月さむく芽吹きそむる槐はくろく風に耐へゐぬ

さいはての望郷館に双眼鏡ひしとにぎりて人みな無口

墓標みな海にむかひて故郷(くに)を恋ふサビタの葩の散りつぐゆふべ

(二)

網走の終着駅に吐く息の白まぎれゆく方のシリウス

茫々と柵なき原に雪を食む馬の親子の首垂るるかげ

宿世ならむ産卵も得ず凍て土に並べ売らるるカムイチ(鮭)エプよ

シベリヤの氷岩浜にせめぎあひ朔北の夜は灯も風も死す

流氷はまこと夜闇に哭くといふ嘆きにも似ず瞋(いか)りにも似ず

地底まで凍てゐむあさを樹々の梢(うれ)、瑤珞をさげ冬を粧ふ

雪かとも散り舞ふ

御祭石獅に

俤ひて凡そ旅の

こころに

洋三

津川洋三　新雪主宰の色紙

雪かとも散り舞ふ柳絮石獣に凭れて見をり旅のこころに

草氷、旅はてし日の目裏になほさゐさゐと光りて顫ふも

最果ての北のパノラマきらめきて凍てつくものは憩ひ語らず

遺　跡　㈠　〝アンコールワット〟

錆色の水這ふごとく湧くごとくめぐるデルタにひつじ草咲く

王の道・従者の道に象のみち、アンコールワットの石畳踏む

崩えぼとけ台座にきざむ石柱の影しんしんと列をくづさず

石壁に彫られしアプサラ数知れず妖しき微笑に頬を翳らす

火焔樹におほはれゐたる石廊か塵泥とまがふ蟻の列ゆく

ヒメシバに似たる穂やさしと摘む原のはたてに光る塔の連なり

塔頂の洞にひえびえ風わたり涅槃仏一体、時空超えたり

枕辺にアンコールワットの鈴(れい)ひとつ韻き聞く夜をささめ雪降る

〝ラージギル〟

ラージギルの未明の風に晒されて冬のオリオンしばし探すも

掌を合はす方より陽のさす霊鷲山（りやうじゅせん）　岩根も人もむらさきに染み

人よりも仏を知らむ牛ひとつ我を見上ぐるほそきその目よ

みづからの影食むさまにうなだれて砂道追はるる羊の群れは

砂漠とぞ見まがふ河に晒さるる屍のいくつ原型とどめず

夕光に染まりて人ら声もなくうずくまるのみ釈迦牟尼の塚

旅はてのほとけのくにの冬空に飛天のごとか絹の雲透く

〝ガンダーラ〟

ガンダーラの石塊のみの地に緑かゆれかくゆれ一樹たちをり

シルカップの僧院跡か燭台に鳥のいくつが水飲みあそぶ

異教徒に首はねられしみほとけの肩にもつれて白き蝶とぶ

崩え仏も首なきほとけも共々にその土肌をぬくめおはすも

天の下在るはひとりと思ふまでガンダーラの野の雲に対きをり

風と雲と

頬さやる風にふくらみあるといふ少女と夕べの眉月あふぐ

美術館（ミュージアム）のそらの絹雲〈喜多郎〉の澄める音色を心にながす

掌にひとつ芋餅ぬくし呆け髪をスコトン岬の風にさらして

知床富士の残れる雪にかげうつし雲ひとつゆく国後(くなしり)島を指し

潮風の行き止まり駅オレンジの無人車二輛ほすすきに消ゆ

夕光に銀の囲を張り風にゆれ風とかたらふ蜘蛛のひとり居

野のはてを遠街（をんがい）の灯のゆらめきてアリスの囁き風なかにきく

ロッキーの空のひとひらふるさとの雲の翳もつ、雲は旅人

慰霊の旅　〝サイパン〟

『わが戦友みな散り果てて夏の日や』彫られし岩礁海に対き立つ

かもめとぶ紺碧の海、自死したる五万の命いきたかりしを

マクマオのくらき茂みより揚羽蝶ゆらめき出でて海を指しゆく

弾痕のくまなき洞窟(ほら)に晒さるる兵器赤錆び玩具のごとし

若者の被写体となり砂丘に砲身一基、赤錆びて果つ

海底のゼロ戦闘機小さくて雀鯛とあそぶ錆びにしままに

十字架と観音像をともに置き祈りと花をたやさぬ島人

人間五万の屍を抱く波やさし、サイパンの海ゆふあかねすも

〝イラワジ川〟

とほき日の戦野に杖つき蓬髪を風にさらせり、夫の後姿（うしろで）

イラワジの流れのうつす白雲は寝釈迦の象（かたち）か動くともなし

屍にて覆はれしとふイラワジの慟哭知るや、原の石塊(いしくれ)

「わが骨はイラワジ川へ流せよ」と夫口癖の水や此処なる

つはもののかげや幻イラワジはただ渺茫と時代(とき)を流して

この国の翁が守りくるるとふ慰霊碑すがし花明りして

かたはらの石塊ひとつ白紙につつみて夫は目な瞑り去る

風のごとパゴダの国をめぐり来て風のゆらせる鈴(れい)にやすらぐ

一　夏

箸を置きまづ起立して目を瞑る、かの日原爆の炸裂せし朝

鴛鴦（をしどり）の水脈ひく平和せせらぎに原爆慰霊碑かげを落せり

朝窓にグラジオラスの花あふれ夏・夏・夏と野菜をきざむ

紫陽花の葉の上に乗りゆらゆらとコーヒーゼリーのゆらす夏色

青年は凪ぐ波中か、海崖に乗り捨てバイクひかりをまとふ

幼日の夜店の易者が灯明りに命うすしと言ひしわが掌(たな)

てのひらに宿りてなほも灯の言葉かはす螢を遣りかねてをり

法師蟬つくづく啼きぬ処暑くれを一夏のまつりおくる言葉と

紙の蝶

風はしる辻に小さく老い母はまだ立ちてをりわれを送ると

去年(こぞ)の寝間着縫ひ上げをして母に着す、再訪(また)ひくれむ夏ぞあれかし

冷たしとはかかることかと頬寄すも逝きたる母は眼(まなこ)ひらかず

あまりにも量(かさ)なき骸(むくろ)くづるるを畏れつつ拾ふ沙羅のごときを

鉦叩きなきつる夜更けたどたどと日記に遺せし母のこゑきく

この日ごろ金魚の態など記しあり和(なご)みし日々とわれもやすらぐ

八十九歳母の日記は大嘗祭をつぶさに記してそれより余白

亡き母の手すさびに生(あ)れし紙の蝶ゆふべ灯りを吸ひてはららぐ

遺　跡　(二)　〝地母神〟

地母神は乳房あまたをゆさゆさと纏ひて立てり赤道直下

蝶も蟻もかげ一つ見ず指先を陽にやかれつつマヤの文字なぞる

ピラミッドの石の狭間(はざま)にのぞく闇とほき代の声封じてふかし

風なきにテオティワカンの石の間に穂草小さき葩をこぼせり

いざり来て聖母へ祈るインディオの心の叫び大伽藍(カテドラル)に充つ

鳩のゐる景のやさしもゴシックの高窓の辺に羽やすめゐて

のみど晒し探すカリブ海の十字星、水平線にまたたかずある

〝コーランのこゑ〟

あこがれのイスタンブール朝明けを大地の果ての駅に降り立つ

海峡をしらしら渡る蝶ひとつたしかに見つと〈冬衛〉へ叫ぶ

（詩人安西冬衛）

靴音も羽ばたきさへもコーランの声とまがへり旅のドームに

ひなげしの花また咲くに丘の辺のエフェソス遺跡朽ちゆけるのみ

娼婦窟・浴場・図書館それぞれに石は残りてとほきを伝ふ

石壁の隊商宿(キャラバンシティ)の屋根くづれシルクロードにひとつ残れり

〃薔薇窓〃

われいまだときめきありてパピヨン(蝶)々のさまにローマの石畳ふむ

薔薇の絵のステンドグラスゆ差す光(かげ)に少女は項(うなじ)を染めて祈れり

古き代の人間(ひと)の底ひの魔性みしコロッセオの昼、しろき半月

ふりむけばバチカンの聖堂夕映えて石畳の坂ゆるゆるつづく

荷物とく手を止めてきく教会の鐘の音ゆふべの靄になびくを

秋ふかし

夕光のいろはもみぢはあかあかと茜流しの師の歌碑つつむ

もみぢ焚く烟は九輪の塔の辺に靄ひて夕べの庭を虔しむ

不帰方(こずかた)の古城の石に背をあづけやすらふ蜻蛉の思ひききをり

賢治の言ふりんごのいろにたそがれて弧光灯(アークライト)にその詩碑泛ぶ

友禅の絵柄とも見てあふぎゐつ縹(はなだ)のそらに浮く綾もみぢ

長旅の果ての秋鮭(あきあぢ)ふるさとに空洞の腹さらし吊さる

清しきは淋しきものよ秋鮭の空洞の腹割(さ)くゆふまぐれ

秋鮭の身の空洞をさばきつつ冬に入りゆく氷雨ききをり

冬の音

冬の音しのばせ雨の降るゆふべかくて来る老い払はむと立つ

鰤起しとどろく夕べの庫裏に立ち寒さへ向かふこころ定まる

白き杖の舗道(いしみち)叩き行く音のとぎれとぎれにひびく夕暮れ

少年が少年を殺めし報道くり返す夕べステンレスきしきし磨く

明日ありや、危ぶむ一夜を癒しつつ土鍋の蓋がコトコトと鳴る

喪の葉書しるす夜の更け筆ペンのとどこほりつつ紙を擦る音

湯の宿の小障子にきく雪の音お百度まゐりの坂も積もらむ

くらみゆく玻璃戸をやまず打ちつける霰の音のきさらぎとなる

越前岬

日本海茫洋とあり人はふとユーラシアの果てロカ岬をいふ

波のなか道やあらむかひとすぢの潮蛇(うしは)行ししろく流るる

くわんおんも路のほとけも水仙にかこまれおはす越前岬

うつむきて何おもひゐむ水仙のしろき花群海へなだるる

水仙の細葉の艶をいとしみし亡き父ぞ顕つ着流しのまま

冬陽さす片潮道に香をまとひ媼がひとり雪中花売る

「甲箱蟹(かふばこ)はおやつだつた」と浜人は過ぎし日を言ふとほき目をして

水槽のガラスを通し「わかつちよる」と蟹は眇(すがめ)になりて嘯(うそぶ)く

深海の底に育たむ孕み子を旨しと好むわれや何なる

鏡面に水仙一束匂ひたち夜更けの海は雪くらみ降る

澱むもの浚ひつくすと逆巻けり冬・日本海・波しぶきあげ

仏の国へ

時刻(とき)告ぐる鶏の声きき目ざめたりラオスの街は草匂ふ風

あかときの舗道に並び黙々と児らも若きも僧に喜捨なす

逆のぼるメコンの朝川波ひかり左右（さう）の山並み故国に似たり

戦乱をのがれてほとけら岩窟に肩よせおはす四千体とふ

みほとけは諸手つき出し五指ひらき戦(いくさ)拒める「印」結びます

農の国ラオスのほとけは豊穣を扶けむと地へ手を垂れたまふ

焼畑の畝間を走り湧くごとくはだしの子らは声あげて来ぬ

一日(ひとひ)かけ着きたる集落(むら)は家ごとに身の丈を越す水甕を置く

遠き代に死者を葬りし甕ひとつ覗くをためらひ音たてず来ぬ

壺を抱く形に骨はしらしらと遺跡の夕をさらされゐたり

手を合はす仏いまさず、手を合はす人にも逢はず、吹く風やさし

箔剝げし廃仏の眼の澄みたるをレンズはしかと捉へてゐたり

(三)

明日(あした)

二月の春

なんとなく仕残せしことあるやうな二月の不安もどり雪降る

絨毯に洋蘭の葉の影をどり冬日の部屋はサスペンスめく

槇の木の葉尖の雫ふるへつつ怺へ怺へしひかりをこぼす

バラの芽の小さき針に雪降りて傷つきやすき受験期の少女

しわしわの薄きハンカチねむごろに畳み直して少女うなづく

くれなゐの花の輪舞(ロンド)かシクラメン雪降る玻璃戸を背後にもちて

ものの音なべて吸はるる雪の夜や素面(しらふ)のわれは眠るほかなく

雪を除(よ)けすずしろ掘りて粥を煮る春はとろとろ来るがよろしと

風の野に

蛙子はけけろけけろと風の野にわらべの頃のゆふべを呉れぬ

「春物が揃ひました」と広告ひらり風花の舞ふ夕べとどきぬ

捨て置きし牡丹の新芽雪に透く大地へ命あづけたるまま

音やはき流れの岸を埋め尽し野辺の星とやイヌフグリ咲く

ジンチョウゲ縄に巻かれて幾百の花芽よせあふ淡雪のなか

余寒なほ去りやらぬ朝、足許の雪に水仙あをく滲めり

風寒く衿立てゆけば田の畦にうずくまるごとノボロギク咲く

風の野に立杭のごと呆け立ち鷺は胸毛をふるはせて夕

春宵

師の葬りすませし後のしづごころ穀雨やさしく嫩葉をぬらす

（節子氏をしのびて）

師の君の魂（たま）のしづくか春の夜の闇ふかぶかと黒百合の花

水にそひ椿咲く路あとのなし教へたまひし人もいまなく

（径子氏をしのびて）

ふりむけばもの言ひたげに水仙は角ぐみゐたりすんすんと緑（あを）

洩らしたる友のひと言判じかね苺の粒をゆつくりつぶす

春の蚊の迷ひ寄り来てやすらへば手の内もまたやさしき宇宙

嫁(ゆ)きし娘(こ)の残せる和紙の内裏雛寸あるなきが春により添ふ

「オレだよ」と変声期の声うるませて少年が夢を語る春宵

いもうとよ

寝たきりとなりて三年(みとせ)の妹の足にはかせるピンクのソックス

癒ゆるなき病ひといふも妹よいまひとたびの桜(はな)に逅ひませ

「死ぬことは怖くはない」と妹はふるへる指もて文字盤をさす

五筋(いつすぢ)の管にいのちを統べられてきみおのづから管となれるか

とりあへず「生」をゆるされ目瞑れる人は泪をまなじりに曳く

息するも動くも語るもままならずわれの目底みつづけゐたり

かわきたる眼(まなこ)みひらく妹のひとみの奥に言葉みち充つ

さくら見ず風にも触れね慈悲ありて病む妹は春を生き継ぐ

里山

金鳳花や野蕗のゆるる路をゆく里山はよし、過ぎし日あれば

石段（いしきだ）がいつしか小径となる坂の土のぬくみはとほき日のまま

葉先までつたひて雀は細枝を弓のごと撓め不意に飛びたつ

青葉吹く風に目瞑りたたずめばいつしかわれも樹の一本(ひともと)か

添ひてまた離(さか)りゆきしは妹のかげか、ひそけく青葉きらめき

螺旋階段

他界への道にかあらむ朝光にカーブのひかる螺旋階段

豆の木を登りしジャックわれもまた天を望みて螺旋をたどる

朴の木はしろばな掲げタニウツギ傾(なだ)れを染めて峡の祭ぞ

向つ峰(を)の鉄塔はいま目前(まさき)なり呼びかけたしと言葉をさがす

掲げたるわれのてのひら皺ふかし摑み得しものただにあらなく

屋上に爪立ちするも天遠し、癒されたしと雲に叫べど

遺伝子

鷸(さしば)そは愛しきものよ、ただ一羽慣ひのままに南方を指す

とどまるも逆ふもなく魚の群れ疾風(はやて)となりて銀色ながす

一面にタンポポのポポゆれゐたり継ぐべき命ともにゆらして

秋風のこぼす種子くろし来る夏はなにいろ咲かす遺伝子やもつ

老犬は一瞥の後よこをむく犬には犬のおもひありてか

人よりも心を読むらし、盲導犬のしづかなる目に見入られゐたる

つぶら目の戯れあそぶクローン牛、神の領域犯すならむを

夕つ陽に耳朶透かせ眠る少女(こ)よバイオ論など言ひ張りしのち

「蛙の子は蛙」とふ少年のこゑ受話器をつたひ青葉がそよぐ

母に似ず母に似まじと生き来しを春の鏡に亡き母がゐる

カレンダー

カレンダーをめくれば椿、〈富弘〉の思ひの滲む赤のかがやく

（身障詩画家星野富弘）

朝あけの葉桜の坂まつさらな風との出合ひに今日がはじまる

今朝の顔やさしくうつす壁鏡、明日の日のためバラを添へなむ

白秋のバラの詩掲ぐる教育日誌、二十歳（はたち）のこころを棚隅に置く

青葉吹く風にヨーヨーまはしつつ遠き日の夢たぐり寄せゐぬ

言葉ひとつ推し敲く間を硝子鍋(キャセロール)の水は湯となり空気となれり

洗ひたてのブラウスのやうな短歌一首シャボンの匂ふ指にて記す

低音の透明感がたまらないサスペンスドラマ目を閉ぢて視る

熱帯夜のよどむ思考はカレンダーの美女の眸に見すかされゐる

カレンダーをゆらす風あり窓により時間かけて飲む熱きコーヒー

行く方によきことあまたありなむとふとときめきぬ暦繰るとき

灯の下の花

腹太きいもむしいくつかくまひて園灯の下のしろき梔子（くちなし）

くちなしは蕊さへしろし朝光に輪廻転生ひたすらのしろ

山法師かめの一枝そのしろに遠世のしづけさうつす水無月

芥川、愛しきひとの目と言ひし沙羅のしろばな雨にけぶらふ

水清き〈杣〉の朝(あした)にほとほとと沙羅のしろばな土橋くぐり来

蚊帳吊草、〈長塚節〉がその草の直ぐ立ち伸ぶる素朴愛でしと

夕光に文字摺草ゆるる野にありて具縛のわが身しばし放たむ

姫菖蒲のしら露さゆらぐ夕明り、いのちあるものなべてやさしき

添ふるもの否みて一りん備前の壺に秋海棠はくれなゐ映ゆる

コスモスは花片ひらき灯の卓に息吐くごとく花粉こぼすも

萎(しほ)るるもなほ彩(いろ)あせぬポインセチアを冬のあかりと灯の下に置く

風の便り

エフェソス遺跡のそらの碧を恋ひ初秋は胸にトルコ石置く

「風の使者」とふ飛び魚の背のひかる海原恋ほし初秋のかぜ

藍青の秋、海寡黙、語り合ふなにもなけれどひたに対きをり

唐突に謀反(むほん)兆すかしぶきあぐ　海は意志もつもののごとくに

吐き捨てし言葉の網にからめられ仰ぐゆふぞら鱗雲うく

コーヒーに砂糖の溶けゆく束の間を茜は空へひろごりゆきぬ

爪立ちて何を求めむ天はただ仰ぐものぞと掌を垂らし見ぬ

秋告ぐる風の便りをうべなふやポプラ大樹はひねもすそよぐ

晩夏

ゆく夏のユズリハゆるる夕窓辺こるを出さず父母の名を呼ぶ

足そろへ跳び来て閼伽飲む子雀のその影ゆらし晩夏光さす

天上の夢やうつせる落ち蟬の澄めるまなこの琥珀のいろは

片われのイヤリングひとつ掌(た)な底に用なきものの光るさびしさ

壁の絵の少年の吹くピッコロの音色のやうな晩夏の茶房

晩夏光はすかひにさす昼下りユリノキはやも枯色ゆらす

こだはりをいくつ曳きつつ逝く夏かサルビアの朱まなこに沁ませ

月色の綿の花咲くゆふべなり明日の日のこと明日にゆだねむ

夏逝くと夜窓開けば降る雨に見えざる天のめぐみが匂ふ

しみじみと木草をぬらし土に沁む夏逝く雨の音のやさしき

夕刻

秋の陽は一瞬燃えて山の端についと落ちたり明日の日のため

ほむらなす日輪ぐらりと落ちしあと喨々として山ぞ響ける

桜よりなほ華なりと見惚れたり白山染むる夕あかねそら

陽の落ちて動くものなき野辺のそら灯りが遠く点り初めたり

病む身とて己やさしむ夕窓を羽ばたきもせで鳥のかげゆく

葉がくれに夕陽の残す薄明り燠火のやうなやすらぎ呉れぬ

日のくれに障子干されをり洗ひたての桟は少年の四肢のすがしさ

窓といふ窓を撃つごと白光を放ちつづけてビルに墜つる陽

恋ながれ愛が流れてたそがれのセーヌは橋の紋章うつす

たゆたへる茜が闇に移るときエッフェル塔は灯の文字放つ

風の又三郎

ツワブキが黄の花かかぐる昼下り亡き母のごと冬物さがす

呼びたるは他界のたれぞ北窓に星とがらせて木枯しの吹く

雪さそふ木枯しなるや老松の雪吊りのかげふるはせゆくは

たるむなく締め過ぐるなく衝天のこころざし見す、松の雪吊り

裸木は梢(うれ)ことごとく天へむけあしたがあると風につぶやく

暮れいろの真菰ヶ池は灯を吸ひて雪くる前の水のしづもり

さむざむし、一羽の飛べば千羽飛びムクドリの群れ西へ東へ

辻を吹くひゅうるる風の又三郎あられ奔(はし)らせ泪を涸(か)らす

冬　愁

息しろくひとりパン焼く霜の朝、救急車の音ふいによぎりぬ

きみの骨を掬ひて埋めし土の上へにアクアマリンの冬空が垂る

夜をとほし氷(ひ)となりゆかむワイパーの拭ふ硝子にうつる雪照り

自死したる少年のおもひ測る夕、湯呑の温みを諸手につつむ

愛醒めしなみだのごとき灯をまとひ電飾樹たつ夜半更けにつつ

残さるるものの無惨や道の端の泥にまみるるかたき雪塊

冬の川、雪を流してひた急ぐわが過ぎ来しに似たる水面か

いつにても死を諾ふと言ひつつも「今日だけはＮＯ」といつも思へり

明日へ

雪積めば心もとなくひとり居る一日(ひとひ)暮れたり、明日はあした

それぞれの距離保ちつつ五十年、をみな三人(みたり)の追ひ来しあした

不条理とたたかひしきみ、はた一人(ひとり)紙漉の水護り来しきみ

藻のさまに流れのままに湯の街に棲みさびたりとわれは嘯(うそぶ)く

なにくはぬふりして玉葱からつぽが形くづさず吊されてゐる

幸せは過ぎて気付けり、残生の時間(とき)測るゆふバラに雪積む

茜雲〈道長取り〉にたなびきぬ、消ゆるを見届け今日を諾ふ

烏にもあしたのあればひたすらに翼うちふり夕光を追ふ

ひと日終へ仮面を剝がす仕舞湯の温もりぞよき、明日(あす)を恃まむ

ダルマの目入れて願はむことのなく手より落すに起き上りたり

遮断機

夕日背に逃亡者〈アリ〉一匹が列車の壁をひたすら這へり

網棚のすり切れし鞄はミステリーを囁きつづけ運ばれてゆく

青き車輛、赤・白車輛と違ふなく群衆さらふホームは魔術師

ポスターの破魔矢もつ美女に狙はれて動く歩道をビルからビルへ

モノレールの窓に沒り陽は金色(こんじき)の硝子の都市の不思議をうつす

たそがれの都市の流れを塞き止めて古りし遮断機ふらり落ちたり

二十世紀

たまご割るときもテレビはミサイルの音をひびかせ夕闇迫る

（民族紛争）

容赦なくスターリンの像砕かれぬレーニンとほくフルシチョフも逝き

（ソ連崩壊）

シャトルより見下す海に秋津島浮べりといふ神話のごとく

（宇宙開発）

トリトンの蒼の不可思議視つつゐて地球の傲りふとも怖れぬ

（宇宙開発）

しとしとと雨降り止まぬ邃空にハレー彗星流れゐるとふ

（ハレー彗星）

日の本に原子炉の灰ただよひぬハレー彗星去りゆきしのち

（エネルギー革命）

封きらず捨てしメールがしゆわしゆわと眠れざる夜の目に溢れ来ぬ

（I・T革命）

人間が生命を操作するといふ〈遺伝子組み替へ〉次ぞ何ある

（バイオ論争）

さびしげにロードも橋も灯をまとひ夜の東京異境のごとし

（寂寥）

ガラスビルの間に小さき鳥居見ゆ二十世紀の都市いま昏れむとし

（混沌）

矢印の示せるままに来し回廊、冥府近きかふと立ち止まる

（回顧）

跋

伊林利子

大阪生まれの寺前昭子さんが最も多感な少女期をこの北陸で過ごし、なお今も此処で意気軒昂であることを喜びたい。このたび今ここに『回廊』の上梓を見ることが出来たことは殊更にうれしい。数学好きの文学嫌いなどと自ら言っていた人が、

白桃よふれなばそこより傷もたむそのやさしさを灯の下に置く

が語るように、心豊かに柔らかに物を見る心情が、何時の間にか培われていたことが確認されたからである。

寺前さんとむき合っていると〈水〉の性格を感じる。〈水〉は自由自在、機に応じて新しい自らの流れを造る。その闊達さがわたしは羨ましい。しかも、その水はワッとたぎる湯になって、わたしを去就に惑わせたり、また、ふいに冷水になったり、急に迸り跡形もなくなったり…。そしてその度にケロケロと笑う。こうした天真爛漫さは親交が深まるほどに愛らしくなるから不思議であ

る。

昭和五十三年頃「短歌をしたい」と訪ねて来られたときは暫し考えさせられたが、今、

封きらず捨てしメールがしゆわしゆわと眠れざる夜の目に溢れ来ぬ

の一首などを見るとき、この人の底知れぬ探求心に驚かされる。究明せねばやまない意欲がよく見えるのである。

旅を好み旅行詠が多いが、その一首一首に思いが溢れ余韻が残る。寺前さんはそれを、人生の旅路にも類えて、

矢印の示せるままに来し回廊、冥府近きかふと立ち止まる

と、詠んでこの集の掉尾を括ったが、しかし、この人の真の行脚はこれからではなかろうか。「ふと立ち止まる」ことにより、その不撓の心をば、更なる飛躍にかけてほしいとわたしは念じてやまないのである。

平成十三年九月

あとがき

定年を迎え、今後の心の拠り所への漠然とした不安を抱いていたそんな或る日、伊林利子師のお宅で拝見した師の一首のその新鮮さにおどろきました。

旅人となりてゆけるや木の花の紅(あけ)ちりそめし後のかなかな

もし、師との出会いがなかったならば、短歌という友人を見失っていたことでしょう。

父の出征、転勤の度に九回の転校を経験し、結婚後も三度の転居を重ねた私には故郷と言い得る小宇宙はないのです。いま住んでいるこの地が最高の死に場所と思っています。

古稀を迎え、冥府に近いと立ち止まった時、この地の自然の姿や生活の明け暮れを歌集にと思い立ちました。しかし余りの稚拙さにおこがましくて挫折し

かけた私を、はげしく励ましてくださった伊林師、歌友の声援によりようやく上梓する決心をしました。

幼い時より旅を重ねた私の半生の回顧として表題を「回廊」としました。一部を雪ぐにとしてこの地の姿とし、二部は旅の詠草の中から主として夫との慰霊の旅や、アジア各地の仏跡、その他の遺跡探訪での詠草を自選して遺跡とし、津川洋三新雪主宰より戴いた旅の歌の色紙を掲載させていただきました。

日のやうに光のやうに水のやうに流れのやうに明日の日のやうに

初掲の色紙はこの地での全国大会の折（昭和五十四年）前川佐美雄先師より戴きました。素養のない私への御励ましと、『明日の日のやうに』を私の短歌への願いとして三部を明日としました。

拙い一冊ですが有縁の皆様のご指導を心より御願い申し上げます。

前川佐重郎日本歌人主宰にはまことにご多忙の中、序文を賜わりまして身に

余る光栄と感激、ただただ感謝申し上げます。

伊林利子師にはご主人看護のお疲れの中をご助言ご指導をいただき、跋文も頂戴してのご厚情に御礼の言葉もございません。

最後ながら社長様をはじめ、出版社の皆様の御骨折りに心から御礼を申し上げます。

平成十三年霜月

寺前昭子

歌集　回　廊

日本歌人叢書
新　雪　叢書

平成13年12月28日発行

著　者　寺　前　昭　子

〒922－0241 石川県加賀市山代温泉神明町7－3

発行者　石　黒　清　介

印刷所　日本文芸社印刷

製本所　亜　惟　製　本

発行所　短　歌　新　聞　社

〒166－8555 東京都杉並区高円寺南4－13－9
電　話（03）3312－9185番
振替口座 00150－4－21683番

定価 2500円